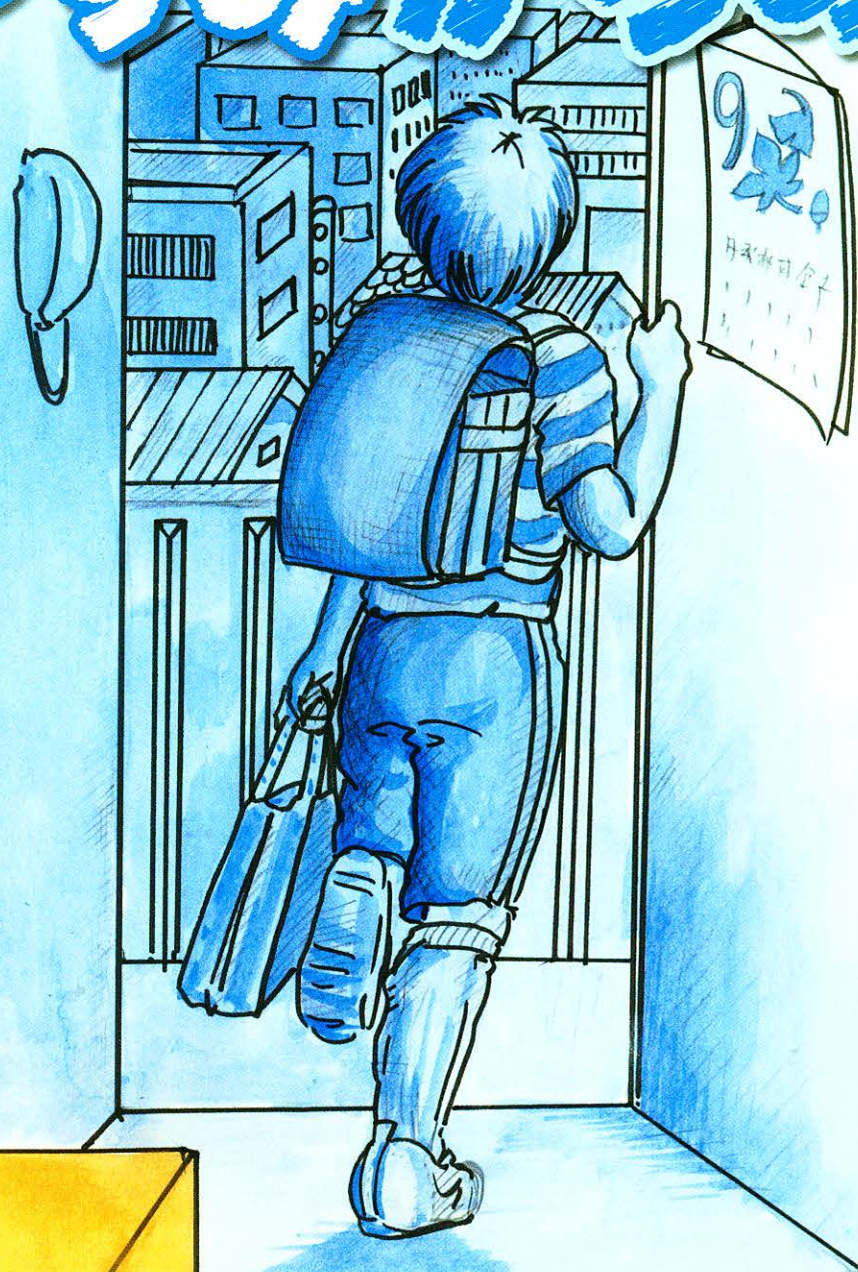


第10回とよた絵本コンクール最優秀作品

ぼくのなつやすみからの しゅくだい

さく 小澤清子



第10回とよた絵本コンクール最優秀作品

ぼくのなつやすみからの しゅくだい

さく 小澤清子





ぼくのなつやすみは 車くるまに荷物にもつと お土産みやげをつめて
おじいちゃんの家いえに向かうことむから始まるはじ。

ダリヤの色いろは なぜそんなに美しく赤あかいのか？

セミはなぜそんなに せわしなく鳴くなのか？

ぼくのいつもの夏なつがやってきた。

虫かごと捕虫網ほちゅうもを持って出発しゅつぱつだ！

空そらの色いろ 風かぜの色いろ 花はなの色いろ なにかもがなつやすみの色いろ。



空には入道雲そらにやうどうぐも

ぼくのなつやすみ

たんぼの稲もさわさわとみどりの海いなえうみのよう。

まっすぐ続くあぜ道つづきみちは

ぼくの夏の遊び場なつあそびば どんぐり森もりに

まっすぐ まっすぐ のびている。

ぼくのいつものなつやすみ。



そして ぼくは いつも

このどんぐり森の一番奥の

一番大きなどんぐりの木に あいさつをする。

今年も来たよ。よろしく。

大きな 大きな どんぐりの木

毎年欠かさず あいさつして

毎年 ここで カブトムシや

クワガタ セミ チョウチョを 追いかける。

今年もよろしく どんぐりどん!



たんぽのカエルの合唱がっしょうが なんだか静しずかになってきたある晩ばん

「おーい こぞう おーい 庭にわにでてこい！」

と ぼくを呼よぶ声こえ。

タマとぼくは 庭にわを見る。

カエルが ほおずきの提灯ちようちんを持もって立たっている。

「こぞう おまえを迎むかえに来きたんだ。ケロ」

庭にわのダリヤやひまわりも暗闇くらやみでざわざわと

空そらには コウモリが飛とび回まわる。

「どんぐり森もりに案内あんないするから ついてこい ケロ」



カエルが提灯もって先に行く。

池から 大きなコイが 顔出して

「今夜は どちらへ 行きなさる」

と、水かける。

頭の上ではコウモリが

「いそげ いそげ」

と、ぼくを追い立てる。

夏の夜の草かげは、

わっさ わっさ ゆっさ ゆっさと 夏の花々が話してる。

カエルやコイと いつから話ができるようになったのか？

ぼくは 夢を見てるのか？

やがて どんぐり森が近づいてきた。



ぼくが昼間

チヨウチヨをおいかけた 大きなどんぐりの木には
たくさん森の生きものが集っていた。

それは 森の命がみんなあつまっているような風景だった。

「どんぐりどんは、こぞうに話があるそうだ。

よくきくんだぞ。ケロ」

と カエルが木の幹から話しかける。

「今年もよく来た。お前がくるのを毎年楽しみにしておった。

だが わしは 次の夏は おまえに会えない。

ここは 人間が住む町になるそうだ。

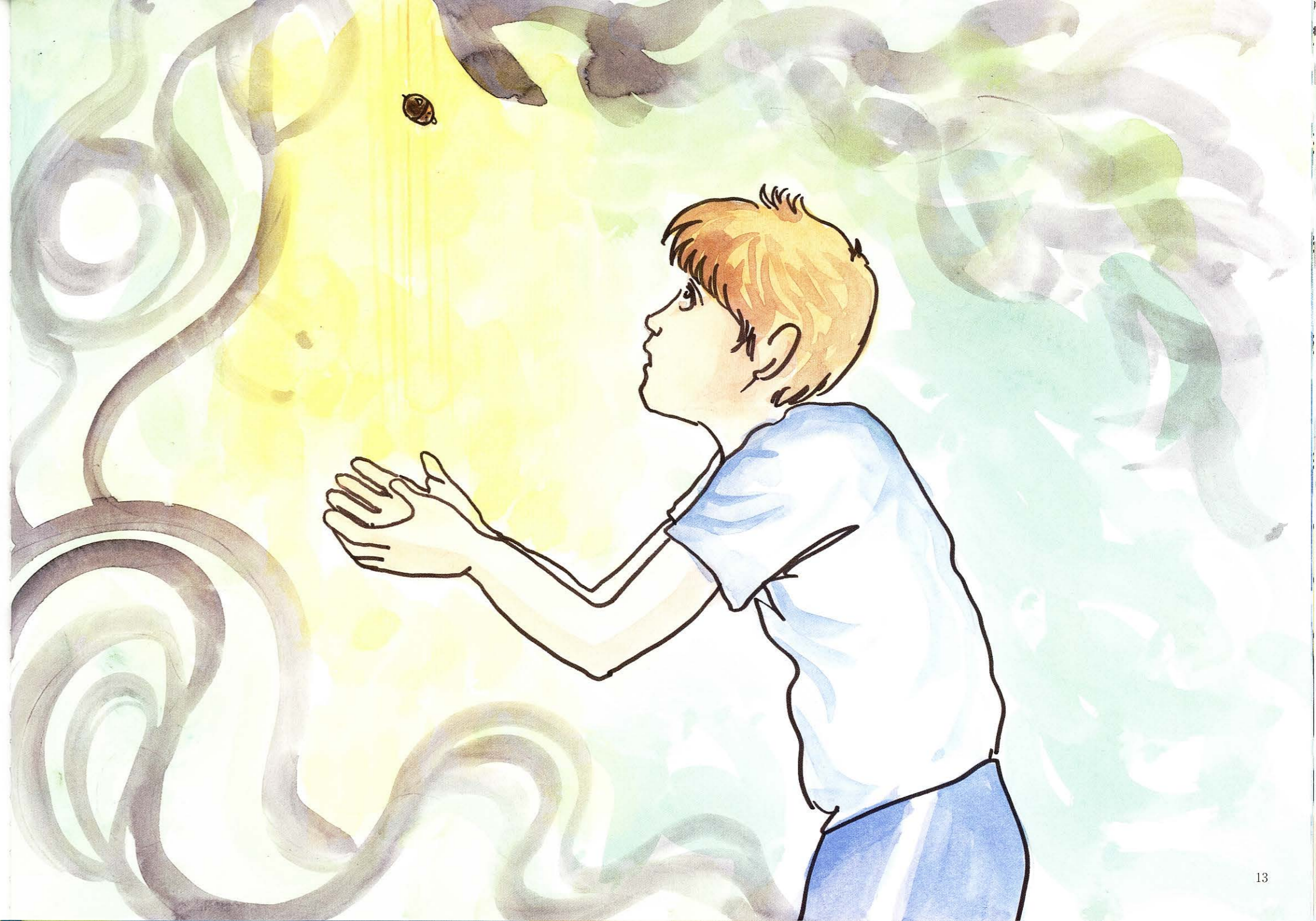
わしは この秋に切られる。おまえさんも気づいておろうが

わしらも人間と同じようにみんな生きている。

毎年 おまえに会えるのを楽しみにしておったが

さようならだ。

ひとつ おまえにたのみがある。」



そういうと どんぐりどんは

大きく 葉を広げて ゆっくりと枝を伸ばして

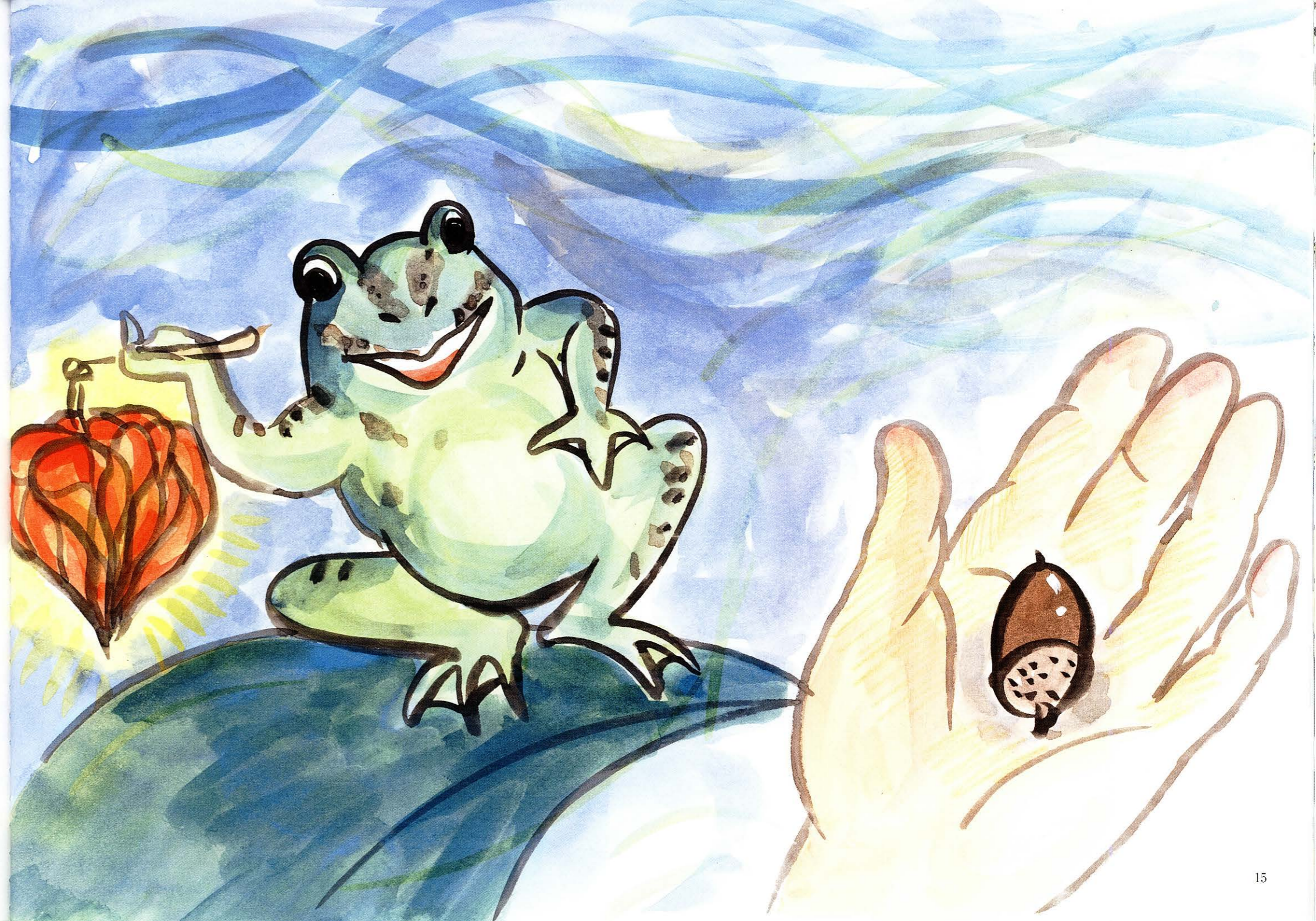
ぼくの手のひらへ どんぐりを ひとつぶ。

「たのんだぞ この子を 来年の夏に

この村の 一番景色の良いところへ 植えてあげておくれ。」

ぼくの手のひらへ どんぐりどんの命のカプセルが

渡されたように感じた。



どんぐり森の出口で カエルとわかれた。

「たのんだぞ おれらの仲間も

おまえには つぎの夏は あえねえ。ケロ

次の夏まで 森の仲間は

もうふたつ向こうの山のむこうまで 行かねばならねえ。

今年の夏で こぞうともさよならだ。ケロ 元気でな。」

カエルはそういうと闇の中に消えていった。



ぼくのなつやすみは ふしぎな体験で幕を閉じ

明日から9月だ。

ぼくのなつやすみのしゅくだいは まだまだ終わっていない。

けれども どんぐりの木との約束

ぼくのなつやすみからのしゅくだいのどんぐりは

ちゃんと植えた。

来年の夏は いつもものなつやすみとは言えないが

このどんぐりの苗を植えるという しゅくだいだけは

忘れずにすませたいと思ってる。

著者プロフィール

小澤 清子

みよし市在住

30年間中学校で美術を教えながら自分の作品を制作し、時々豊田市美術館で作品を発表しています。

この春から中学校の門を出て小学校勤務となり、ボランティアの方々の「絵本」の読み語りを通じて、その素晴らしさを再考し、大きな画面から小さな画面の絵本製作に導かれました。

著者コメント

私たちを取り巻く環境は、刻々と変化し続けています。

便利への代償として、自然が減少しています。自然を失うことを、人間の視点ではない「自然」視点から描いてみました。

山や川や草も木も心をもっていて、人間など及びもつかない時間の感覚で、命を次の世代に伝えていく姿を感じてほしいと思います。

心を澄ますと、自分に与えられたわたしだけへの宿題が見えてきませんか？

ぼくのなつやすみからのしゅくだい

2013年2月26日 初版第1刷発行 著者／小澤 清子（おざわ きよこ）

発行／豊田市中央図書館 〒471-0025 豊田市西町1-200

印刷・製本 東名印刷株式会社

©第10回とよた絵本コンクール

主催／豊田市中央図書館 主管／とよた絵本コンクール実行委員会

後援／公益財団法人豊田市文化振興財団

とよた絵本コンクール

とよた絵本コンクールは、2003年から愛・地球博のパートナーシップ事業として始まり、心のこもった夢あふれる絵本を通じて、次の世代を担う子どもたちに、21世紀に生きるためのメッセージを残そうとするものです。



